結　語

本文にも述べたが、今は「こころの時代」と言われて久しい。しかし、今何故「子どものこころ」なのかと改めて考えると、最近の低年齢の子どもたちが引き起こした様々な凶悪事件、他人から注意をされると我慢ができずキレる子どもの出現、挨拶ができずコミュニケーションもうまくとれない子どもたち、といったような、「普通の子どもたちが抱えるこころの問題」が社会の視聴を集めるようになってきたからと考えられる。

第19期日本学術会議の「子どものこころ特別委員会」がまとめた本報告書は、このような現在の我が国における「子どものこころにまつわる諸問題」に対して、できる限り広汎かつ俯瞰的な視点から、アプローチしたものである。すなわち、親と対置する子ども、家庭で生きる子ども、学校で学び遊ぶ子ども、社会の中で活動する子ども、それぞれがかかえる問題を抽出し、できる限りデータに基づいて考察し、その問題の一部に対しては提言をしたものである。

1）子どもの脳の発達の過程を考えると、生まれたての時期には未熟な状態であった脳は、遺伝子で規定されているところは勿論あるものの、基本的には環境とのコミュニケーションによって育まれて行く。しかもその育まれる時期については、**可塑性に富む最も適切な時期、つまり臨界期があることを述べた。**物質的のみならず精神的な意味でも**環境の良し悪しが、その後の子どもの成長を規定する**といっても過言ではないことを、正しく認識する必要がある。

2）親子の関係に関して、親の親としての心構えの現状を考えると、**子どもが親に求めてくる様々なサインを正確に把握できているかどうかが、大きな問題**であろうことを指摘した。また、そのようなやりとりを通しての「育み」の過程においては、一定の範囲での厳しい躾（体罰とは異なる）が必要であるとともに、**適切な励ましや賞賛が育みを強化することが明らかになっている。**

3）家庭での問題については、特に栄養摂取の観点から見て現代の小・中学生はいわば危機的状態にあり、極端に言えば学校給食で辛うじて栄養を保っている面さえあることにむしろ驚きを禁じえない。さらに、**朝食の摂取の有無が子どもたちのこころに与える影響が大きい**ことも注目するべき事実である。一方、住居環境については、核家族化、高層住宅化などの**社会的要因に伴って、子どもの生活の場に大きな変貌が生じたことを認識する必要があり、**それが遊びの形態を外遊びから内遊びに変える大きな要因となっており、特に、子どもたちをテレビやテレビゲームに走らせる結果となったと認識する。

4)学童期の子どもが最も長い時間を過ごす学校での問題を扱ったが、ここでの大きなポイントの一つは、子どもが学びの場から逃げている現状を認識することであった。教師と学童との関係は、親子の関係とも異なり、良い関係の構築には双方向からの努力が必要であることは明らかである。もう一つ重要な事は、子どもの学習が表面的で内容を伴わないものになる危険があり、もっと子どもたちが多少の危険性をも乗り越えられるような実体験ができるよう考慮するべきことであろう。

5)社会の中での子どもに注目して検討したが、子どもたちが社会の一員として迎えられるには如何なる条件が必要なのかを考えながら考察した。当然ながら社会は一様ではなく、子どもの将来を考えて努力する自治体もあれば、ほとんど無関心の自治体もある。そのなかで、情熱を持って子どもを迎えようとする自治体の実態を知る事は大いに役立つであろう。地域社会とは、子どもにとっては遊び場でもある。社会が自然破壊も含めて不用意に変わるならば、子どもの生活の場もそれに伴って変らざるを得ないことを理解する必要がある。

明日の我が国を担うのは、今の子どもたちである。彼ら・彼女らの健全な発達・発育・成長は、そのまま日本の健全な発展を意味する。その思いを込めて、この報告書を社会に向けて提出する。